15/05/20

【ｱｼﾞｱ特Ｑ便】呉軍華氏「中国を視る」　習近平時代の中国を解くキーワード「不信邪」

ＱＵＩＣＫではアジア特Ｑ便と題し、アジア各国・地域の経済動向について現地アナリストや記者の独自の視点をニュース形式で配信しています。今回は、日本総合研究所理事・呉軍華氏がレポートします。

過去二年来、習近平指導部は大胆な市場経済化プランを打ち出した一方、厳しい政治・イデオロギー引き締めを進めてきた。ほとんどのチャイナウオッチャーの意表を突いた展開であった。なかでも習近平時代において中国が民主化に向けての政治改革に踏み切るのではないかと期待していた人にとっては大きく失望した二年であった。

周知の通り、胡錦濤時代において、中国経済は急速に拡大したが、産業構造の不均衡や腐敗の横行、環境・生態系の破壊といった問題の先鋭化も急速に進んだ。「政経分離」、つまり政治的に共産党一党支配の現体制を維持しつつも経済的に市場化を進めるという精神分離的な改革アプローチがこうした状況を生み出した最大の原因だと一般的に認識されていた。こうした認識のもとで、経済だけでなく、政治的にも抜本的な改革を遂行し、いわば政経一体型改革路線を採用することが、最も合理的な選択になる。しかし、習近平指導部はむしろ政治と経済の分離を一層大きくするような改革アプローチを選んだ。

なぜ、このような選択をしたのか。「不信邪」、つまり伝統理論はもとより、現実や歴史、他の国々の経験に大きく左右されず自らの信念に基づいて行動を全うしようとするという習近平世代に突出する心理的特質が大きなインパクトを与えているのではないかと思われる。ちなみに、２月６日、習近平主席の右腕である王岐山紀律検査委員会書記が習氏の言葉を引用する形で「共産党一党支配体制が続く限り腐敗問題が解決できないという人がいる。しかし、我々中国共産党員は断固としてそれを信じない（不信邪）。我々は自らの問題を見つけ出し、自らの力でそれを解決できる自信を持つべきだ」と語っていたという。

「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対に腐敗する」というのはイギリスの歴史家ジョン・アクトンが権力と腐敗の関係を考察し 1887 年に残した論断であった。中国を含むこれまでの国々の歴史はこの論断の正しさを実証してきた。それにもかかわらず、習近平指導部はなお共産党一党支配体制を強化することによって腐敗問題を解決することが可能だと声高く主張している。これは確かに「不信邪」というメンタリティーの持ち主でないとできないことかもしれない。

中国では、「不信邪」は往々にして無鉄砲な若者の行動を形容する言葉として使われている。こうした言葉がトップレベルの政治の場で使われていることは現指導部を構成する人々たちがなお文化大革命時代に横行した紅衛兵的メンタリティーから脱出しきれていないからだとの主張がある。

しかし、筆者はこれだけでは説明しきれないと考える。1980 年初期、若き王岐山がもし「不信邪」のようなメンタリティーを持っていなかったら、時の最高指導部に大胆な政策

提言をし、結果的にその後の改革開放に大きく貢献した「改革四君子」の一人になることができなかっただろう。同様に、1992 年、時の指導部がもし「不信邪」的に「社会主義市場経済」という伝統的政治経済学の理論では考えられないようなコンセプトを打ち出すことができなかったら、中国経済が未だに低成長に喘いでいるかもしれない。こうした事例にみられるように、習近平を含む今の中国を率いる多くの指導者にとって、「不信邪」は血の熱かった若き青春時代の懐かしい思い出の一つだけでなく、指導者に上り詰めた過程での大きな成功体験の一つでもあった。

無論、「不信邪」的に今日まで辿りつくことができたことは、決してこれからも「不信邪」を頼りに明るい未来を迎えられることを意味しない。習近平指導部が本当に腐敗問題を抜本的に解決したいならば、「不信邪」に対する信念を持って世の中の常識に挑戦するだけにとどまらず、創造的思考で現体制を「不信邪」的に改革しなければならない。折りしも、アメリカを含む民主主義体制下の国々も自己改革をしないと機能不全の危機に直面している。この意味で、ただいま中国とアメリカを中心とする西側社会の間で展開されている競争は政治制度の機能化に向けての改革の競争でもある。体制移行に関心を持つ研究者にとっては、これからは面白い日が続く。